

自由17

日本文化史における猿猴図の類型と変遷の研究—狩野派模本群の検索と類型分析—
都守淳夫（犬山市・愛知）

懸案の京都および東京美術倶楽部所蔵の売立目録の調査を完了した。共に札元本を主とする書入情報の多い目録で、前者の2067種2340冊、後者の2025種2125冊（いずれも非公開資料である）の調査から新規に81件の猿猴図が追録され、これで売立目録出自の猿猴図は合せて1900件（同一作品の重複出現を含む）となった。なお、その構築に4年の歳月を要した売立目録データベース・サイズは、現在54法人の所蔵する4164種17,426冊の所在目録に成長したが、これはわが国で開催刊行された主要入札売立会の方をカバーしている。これに5000件の検索家名索引を付加したユニオンカタログの刊行が各界より望まれるに至った。

つぎに、売立目録所収の猿猴図相互の類縁関係と猿猴捉月図の変遷を解明する手段として、狩野家伝来の絵画模写本群の検索と図版複写を東京国立博物館絵画室において実施した。検索対象は絵画室が資料化を終えた原作者185名1126件の模本資料であったがそこに12件の猿猴図を確認した。1952年収蔵品目録の絵画編に収録する猿猴図148件の70点が模写本であってみれば（他は真蹟10点、版画20点）、東博における模写本群の資料化は端緒についたばかりの処で、これは10万点の絵画資料を蔵する博物館の無理からぬ現状であった。しかし、そこには初期狩野派古画の模本が多く整理されており、原作者狩野松栄／永徳（1592没／1590没）六曲一双屏風絵模本の右幅四面に描かれた連猿捉水月図の構図は貴重な発見であった。

自由18

人工ナッツ法によるチンパンジーの匂いの知覚の分析
上野 吉一（北大・実験生物センター）

平成6年度に引き続き、霊長類を対象とする簡便かつ汎用性のある匂いの知覚に関するテスト法として、強化子の入ったカプセルに匂いを付着させて提示しフタ開け行動を要求する「人工ナッツ法」の確立を進めた。厚さ3mmのアルミ管（本体：i.d.25mm、キャップ：i.d.30mm）を加工しカプセルを作り、ビニルテープでキャップを固定する方法を用いた。チンパンジーがこのナッツを開けるには、口と手により約20秒程度要した。この時間は、強化を効率的に得るために弁別を必要とさせ、かつナッツを開けることへのモチベーションを維持させる負荷量として、さらにフタを開けるのに伴い匂いを嗅ぐ時間（刺激提示時間）として、適当だろうと判断した。そこでこれを用い、霊長研で飼育されているチンパンジー（ペンデーサ、ボボ、パン）を被験体として、2種の匂い間の弁別テストをおこなった。匂いの刺激セットとして、1：リンゴー匂い無し、2：モモースカトール（糞尿臭）、3：リンゴーモモを用いた。この結果、ペンデーサは弁別を良くおこなったが、反対にボボは全くしないというように、この課題で匂いを手掛かりとするか否かはかなり個体差が大きかった。これはナッツの負荷量と強化量を調整することにより、ある程度改善できると考えられる。さらに、臭い有りー無しより匂い間の弁別の方が、安定しかつ正確に弁別ができた。これは既におこなったフサオマキザルの結果と一致し、匂い無しの状態を作り出すことが現実的には不安定なことに起因すると考えられる。今後、本方法をさらに洗練させ、匂いの知覚の詳細な検討を試みたい。